

田舎者

豊島与志雄

青空文庫

「ドラ鈴」がこのマダムのパトロンかどうかということが、四五人の常連の間に問題となつていた時、岸本啓介はそうでないということを——彼にしてみれば立証するつもりで——饒舌つてしまった。第一、みんなが、たとい酔つていたとは云え、さも重大事件かなんぞのように、夢中になつて論じあつてるのが滑稽だった。——「ドラ鈴」はめつたに姿をみせることはなかつたが、たまにやつて来る時には、いつも酒気を帯びている。そのことが結局、ふだん白面の時には、マダムがどんな客にも一步もふみ込ませないほど堅守する裏口から、こつそり忍びこむことを証明するわけで、また、誰もそうした「ドラ鈴」の姿を一度も見かけたことがないのが、逆に、彼が用心深くそういうことをしてる証拠になるし、或は、マダムの方から出かけていってどこかで逢つてゐる証拠になる、というのであつた。二人のそうした関係は、人中でのその様子を見ればすぐに分る、というのだった。「ドラ鈴」は扉を押して一步ふみこむと、そこに一寸足をとめて、自分の家だと云わんばかりの落付いた微笑を浮べ、室の中をじろりと見渡し、奥でも手前でも隅っこでも、どこということなしに、空いている席を物色して、そこへつかつかと腰を下しに行くのである。その、マダムへもサチ子へもまた他の客にも目をくれず、場所を扱はずにただ空席へ歩み

よる態度が、こうした小さなバーでは、よほどの自信と確信とがなければ出来ない芸当で、そして彼はそこにゆったり腰を落付けて、先ず煙草に火をつけるのである。するとマダムが、スタンドの奥から急いで出て行って、ばかに丁寧なようなまた馴々しいような曖昧な会釈をする。彼はゆるやかな微笑で軽くうなずいてみせる。それから眼を見合せながら、恐らくほかの意味を通じあいながら、どうです、忙しいですか……ええお蔭さまで……まあしつかりおやりなさい……なんかって、實際人をばかにしてるんだ、というのである。

そして人に見られようが見られまいが、二人でそこに凶々しく向いあつて、コーヒー、時にはコニヤック、それからアイス・ウオーター……なんかをのんで、暫くして彼が立上ると、マダムはいやにつつましい様子で表まで送つて出て、そこで二三言立話をして、それから彼女はすまじきつた顔付で戻ってくる……ばかにしてるじゃないか、というのである。——それが丁度マダムの不在の時で、サチ子が向うの隅でかけてるジャズのレコードがいやに騒々しい音をだし、ただでさえ光度の足りない電燈が濛々とした煙草の煙に一層薄暗くなつて、大きな棕櫚竹の影のボックスの中は、蓋をとった犬小屋みたいな感じだったが、そこで、彼等は声はずませ、眼を輝かして、語りあつてのだった。そうだと主張する者は、何もかもその方へこじつけてしまい、それでもあるまいと反対する者は、もっと確

実な証拠を示せと唆かしてるかのようにだった。犬小屋の中に四五羽の雀がとびこんできて、べちやべちや囀ってるようなもので、喉が渇くと、サチ子を呼んでビールを求め、そのサチ子に向つて、ねえそうだろうと同意を強いるのだったが、彼女はただ笑つて取合わないけれど、その紅をぬつた小さな唇から出る笑いは、雀の喧騒の中のカナリヤの声ほどの響きも立てなかった。

その喧騒のなかから、すつと背のびをして、角刈の肩のこけた男が立現われ、ふらふらと席を離れて、室の真中までくると、これより奥へふんごんで……と、首を縮め手足を張つて、ゴリラみたいな恰好をしたかと思えるまに、ひよいと潜り戸を押し、スタンドの向うにはいつていつた。そこへサチ子が、すばやく、真顔になつて、追いつがっていつたので、彼は一寸とつつきを失つて、スタンドによりかかり、いやに酔っ払いらしい息を長く吐いたが、サチ子の肩を片手で抱いたまま、くねくねと身を起して、いらつしやい……と、しやに力を入れてマダムの声色を使ったのだった。それがきつかけで、誰か「ドラ鈴」になつてはいつてこい、俺がマダムになつて、例のところを一芝居うとうというのである。そしてみんなの喝采のうちに、それでも誰も立上らないので、その向うの席に一人でぼんやり、卓子に肱をついてる岸本の方へ、眼を移してきた。

「あんた、学生はん、一役買うて……。」

云いかけて彼は口を噤んでしまった。かたりとコップで卓子を叩く音がして、彼がとまどった拍子に、ひよいと、右手をあげて、おどけた失敬を試みせたとたん、コップがとんできた。彼の肩をかすめ、戸棚にぶつかり、大きな音を立てて、その息苦しい淀んだ空気の中に冷風を吹きこんだようで、砕け散った。

それが、誰にも——角刈の男自身にも——何のことやら分らないほんの一瞬間のことで、次の瞬間には、岸本は自分の卓子を離れて、そこらをのっそり歩きながら、静かな調子で云ってるのだった。

「つまらない邪推はやめ給えよ。マダムとあの人は何の関係もない。僕がよく知ってる。」

岸本と彼等とは、度々出逢って顔見識りの間ではあったが、そんな風に初めて口を利きあったのはおかしなことには違いなかった。そればかりでなく、コップの一件もすぐに忘れられて、角刈の男もこちらに出てきて、みんな一緒になって、本当にそうかと尋ねかけてくるのだった。そうだと岸本は断言した。その証拠には、マダムはあの人の家に入りかかっているし、奥さんとも昔からの懇意であると、饒舌ってしまった。それが、彼等の狡猾な

笑いを招いた。それこそ猶更、マダムと「ドラ鈴」とが怪しい証拠で、もう公然と第二夫人ではないか。そこんところに気付かないのは、さすがに学生さんは若い若い、というのであつた。そして彼等から笑われると、岸本はなおよつきになつて、明かに分りきつてゐることをどうして説明出来ないかと、じりじりしてくるのだった。

固より、明かに分りきつてゐるといつても、それは彼一人の気持からに過ぎないことではあつたが――

あの人――依田賢造――と識つたのも、最近のことだった。郷里岡山の田舎の中学校を終えて、東京のさる私立大学の予科に入学して、愈々東京在住ときめて上京してくる時、その田舎出身の大先輩として、或る商社会社の社長をしてる依田賢造へ、紹介状を貰つてきたのだった。気は進まなかつたが、紹介状の手前、思いきつて訪れてみると玄関わきの狭い応接室に通された。日曜の朝の九時頃だった。長く待たされた後、依田賢造氏が黒衣着物に白足袋の姿で出てきた。指先で押したら餅みたいに凹みそうなその肉附が、先ず彼の眼についた。それから、短い黒い硬い髪の毛、額の深い横皺、荒い眉毛と小さな眼、がつしりした鼻と貪慾そうな口、その口から出る声がばかに物静かで細かつた。その声と眼と全体の感じとが、恐らく「ドラ鈴」の綽名の由来らしいが、うまくつけたものだと思

本は後になつて思つたのである。ところがその最初の印象は、暫く話してうちに他の印象と重なりあつて、茫とした捉えどころのないものとなつた。物静かな細い声が出る口から、時々、太つ腹らしいばかりかび出したところから、小さな眼から、時々、鋭い針のようなものが覗き出すのだった。ところがまた、彼が学校のことや将来の志望などを述べてうちに、いつしか哄笑は影をひそめてしまい、眼はその針を隠してうつとりと、丁度居眠りでもするような色合になつてきた。そこで岸本は電車の中で見る「東京人」の顔を思い浮べ、こくりこくり居眠りしてるか、鋭く神経質に人の虚を窺ってるか、二つに一つの顔しかないことを考えだし、依田氏の顔を不思議そうに眺めながら云つた。

「お眠いんですか。」

依田氏ははつと眼を見開いて、太い眉根を寄せたが、言葉の意味が分ると、とつてつけたように笑つて、日曜日は余り早く人を訪問するものではないと、田舎者をさとすらしく云つてきかせた。そうかなあと岸本は思つて、すぐに帰りかけようとしたが、そう現金に帰らなくてもよいと云われたので、また迷つて腰を落付けていると、依田氏は初めて、郷里のことを何かと尋ねてきた。そこでまた一しきり話してうちに、寺井という名前が出てきた。寺井家は岸本の家と遠縁に當つていて、もう十年ばかり以前に東京へ引越してし

まっつて、それきり岸本啓介の耳には消息が達しなかったが、然しなつかしい名前だった。まだ彼が小学校にあがりたての頃、母に連れられて、町の寺井の家へ行ったことがあって、その時寺井菊子さんに逢った。どんな話をしたか少しも覚えていないが、適宜に石や植込のある閑静な日の当たった庭をじつと眺めて、縁側に片手をつけて坐っていた菊子さんの姿が、そしてその円みをもった細い淋しそうな眉と、澄みきった奥深い眼とが、深くいつまでも彼の心に残ったのだった。其後菊子さんは結婚し、寺井一家は東京に引越したと、父母の話では彼は聞きかじったのだが、菊子さんのことが心にあるので、わざわざ尋ねることもしかねて、ただ一人で彼の面影をはぐくみ、いろんなことがあった末に彼女と結婚するようになるなどと、他愛ない少年の空想に耽った時代もあるのだった。その寺井さんがいま東京にいて、あの人も不幸続きで……と依田氏は言葉を濁すのである。岸本はふいに少年時の夢にめぐり逢ったような気がして、菊子さんという人がいた筈ですがと相槌をうつと、依田氏はびつくりしたように唇をつきだして、硬い口髭を逆立てたが、知っているのかと案外静かに聞くのだった。

「もう昔のことで、一二度逢ったきりですから、向うは御存じないでしょうが……。」
そして口を噤んだのだが、依田氏がその続きを待つように黙っているので、彼は云つて

のけた。

「何ですか、あのひとを本当に好きで、そのことばかり考えていた時があるような気がするんです。」

云つてしまつてから、彼は顔が赤くなるのを感じて、自分でもばかばかしく思つたが、それよりも、依田氏が小さい眼をじつと——それもやさしく——見据えたまま、口髭をなお一層逆立て、太い首を縮こめて、呆れたように云うのだった。

「すると、君の初恋というわけかね。」

そしてふいにばかげた哄笑がとびだしてきた。岸本は抗弁しようと思つたが、言葉が見つからなくてまごついてるうちに、依田氏の太い指先で卓上の呼鈴が鳴らされ、出て来た女中に、奥さんを呼べというのである。岸本は何事かと思つて、寺田菊子さんのことはそのままに、口を噤んでいると、やがて出て来た奥さんが、依田氏に似ずばかに小柄なひとで、細っそりした胸に帯がふくらんで目立って、少し険のある高い鼻の顔をつんとすましてるのだった。依田氏はすぐ岸本を紹介して、笑いながら云うのだった。

「あの寺井さんね、あれが、岸本の初恋の人だそうだよ。」

「まあ。」

奥さんは呆れたように岸本をじろじろ眺め初めた。岸本の方で呆れ返った。何をそんなに笑ったり呆れたりすることがあるのか、腑におちなくて、弁解する気にもなれなかった。

「東京の人」はものずきな閑人が多いと聞いていたが、この人たちもそうかしら、などと考えるだけの余裕がもてて、逆にこちらから二人の様子を窺ってやるのだった。それが、さすがに女だけに敏感で、奥さんの方には反映したのであろう。やさしい笑顔をして、いろいろ尋ねてくるので、岸本も仕方なしに受け答えをしてるうちに、事情が自然にうき出して、初恋というほどのものでなかったことも分り、寺井菊子さんは良人に死に別れて、不仕合せのうちに健気にも、小さなバーを経営して奮闘してる由も分ったのだった。

「昔のよしみに、飲みについてやり給えよ。」

依田氏はそう云って愉快そうに笑うのだった。奥さんも別にとめようともしないで、ほんとの初恋になったら大変などと、にこにこしていた。中学を出たばかりの岸本には、それがまた余りに自由主義的で、律義な両親のことなどを比べ考えては、心の落ちつけどころが分らなくなるのだった。

然しそうしたことから、岸本は意外にも依田氏夫妻と親しみが出来、また、寺井菊子のバー・アサヒ（恐らく郷里の旭川からとつてきた名前であろう）へも出入するようになって

た。

初めは、さすがに、様子が分らないので、午後、客のなさそうな時間にいつてみた。上野公園を少し歩いて、広小路を二度ばかり往き来して、それから横町に曲ると、すぐに分った。赤黒く塗つてある扉を押してはいると、中は変に薄暗く、高い窓の硝子だけがざらざら光つて、室の真中に大きな鉢の植木が、お化のようにつつ立っていた。その向うにいろいろな瓶の並んでる棚の前に、コップを拭いてる背の高い女がいて、近視眼みたいな眼付でこちらをすかし見ながら、機械的に微笑してみた。見覚えがあるようなないようなその顔に、岸本は一寸ためらつたが、つかつかと歩いていつて、お辞儀をした。

「寺井さんは、あなたですか。」

「はあ。」

怪訝そうなそつけない返事だつた。がその時、岸本ははつきり思い出した。不揃いな髪の毛の生え際と深々とした眼附……。だがそれだけで、ほかは夢想の彼女とまるで違つていた。束髪に結つてる髪が、わざとだかどうだか縮れ加減で変に少くさつぱりしていて、額が広く、それに似合つて、すつきりした鼻と引緊つた口と小さく尖つた頤——どこか混血児くさい顔立と皮膚。どう見ても三十歳以上に老けていた。その、夢想とちがつてる彼女の姿

が却つて、岸本を落付かして、岸本はすぐに名乗つてみたのだが、彼女はただ微笑んでるきりで、感情を動かした様子は更に見えなかった。

「まあこちらへいらつしやいよ。」

彼を窓のそばの席へ導いて、自分でコーヒーを入れてきて、彼にすすめながら、真正面にじろじろ彼の様子を眺めるのだった。ちつとも嫌な視線ではなかった。彼はぼつりぼつり話しだした。こんど上京してきたことと、依田氏を訪問したこと、彼女の噂をきいたこと……それから、彼女が黙つて聞いてくれてるのに力を得て、昔彼女に逢つたのを覚えてることを依田氏に話して、初恋かとからかわれたことまで云つてしまった。

「あら、そうお。」

彼女はただにこにこしてうなずいてみせるきりだった。依田氏のところみたいな反応は更になくて、ただ柔いやさしいものが彼を包んでいった。それは故郷といった感じに似ていた。彼女に対する気持は、小母さんというのとはまるでちがっていたが、話の調子は自然とそういう風になつていった。地肌の浅黒い洋装の娘が——サチ子が——帰つてくると、彼女は思い出したように立上つて、甘いカクテルを拵えてくれた。それから、蓄音器のそばに連れていって、レコードを幾枚も取出し、好きなのをかけてあげようと云つた。然し

レコードのことなんか、岸本には更に分らなかつた。三人連れの大学生がはいって来たので、岸本は勘定をして帰ろうとしたが、彼女はどうしても受取らないで、この次から頂くことにすると云うのだった。そうした彼女が、岸本には、まるで「東京」と縁遠いもののように思われた。

然しその彼女も、何度か彼が行くうちには、次第に移り動いて、スタンドの上から客と応酬し、時には自分もリクールに唇をうるおして談笑する、バー・アサヒのマダムとなつていった。それと共に、岸本も洋酒の味を知るようになった。それでも岸本の心の奥には、小母さんとも云いきれず、マダムとは猶更云いきれず、それかつて恋とか愛とかの対象とは更に縁遠い、何か夢の幻影みたいなものが、はつきり残っているのであつた。

それをどう説明してよいか、岸本は自分でも分らなかつたのである。それさえはつきりすれば、マダムと「ドラ鈴」との肉体的関係のないことなどは、一度に分る筈だった。

「とにかく、何の関係もないことは、僕がよく知っている。」

岸本はそう云いながら、やはり室の中をのっそり歩いていたが、みんなは、知ってるだけでは分らない、うまくしてやられてるんじゃないかな、としきりに揶揄してくるのだった。一寸考えなおしてみれば、何でもないことで、どうでもいいじゃないかと投げ出せる

ことだったが、そいつが妙にこんぐらかつて、その上、彼等のうちの、髪をきれいに分けた、顔の滑かな、時々、芸妓なんかを連れてくることのある、若旦那風の角帯の男が、黙つてにやりにやりしているのが、いけなかつた。マダムのために一杯飲もうと、ビールの杯を挙げるような男だが、そいつが、黙つておもてで笑いながら、裏からじつと覗いてるようだった。畜生、と足をふみならしたいところだったが……。

そこへ、マダムが帰つてきた。へんに混血児らしい知的な顔をつんとさして、幾重もの意味を同時にこめた笑みを眼にたたえて、お辞儀とあべこべに身体を反らせて……。

「まあ、皆さん、留守をしてすみませんわね。」

急に明るくなつたような室の中に、背がすなりと高く、頬の薄い白粉の下にほんのりと紅潮している。やあ！ とみんなが、拍手でも迎えそうな気配のなかに、岸本は一人逆らつて、今小母さんの噂をしたところだと云つてしまった。そう、いない者はとかく損ね、とそれがまるで無反応なので、岸本は云い続けた。

「小母さんが、あの……依田さんと関係があるとかないとか、そんなことが問題になつちやつて……。」

彼女の眼がちらと光つたようだったが、瞬間に、それはとんだ光栄で、何か奢らなけれ

ばなるまいと、更に無反応な結果に終わったのであったが、男達の方ではその逆に、へんに白け渡つて、岸本の方をじろじろ見やるのだった。岸本は席に戻つて、煙草の煙のなかで、考えこんでしまった。そこへ、蓄音器が鳴りだし、それに調子を会して、彼等が敵意的な足音を立て初め、マダムはスタンドの向うに引込んで、何やら書き物をしていた。

そして彼等が出て行くまで、出ていつてから後まで、岸本はじつとしていた。するとサチ子がやつてきて、面白そうに笑い出したのだった。思いだしたのだ。あんな乱暴をしちやいけないわ、と云い出した。

「あんな奴は嫌いだ。」と岸本はふいに云つた。

「だって、土地の人だから、仕方ないわ。」

十七の娘にしては、ませた口を利いて、彼女は囁くのだった。マダムのことをいろいろ聞く人があるけれど、知らないといつて笑つてると、チップを余計くれるんだと。岸本は嫌な気がして立上ると、マダムは向うから、いつもの調子で、晴れやかに笑つてくれるのだった。

岸本は外に出て、息苦しかったのを吐き出すように、大きく吐息をした。

そのことがあつてから、岸本は妙に人々から目をつけられてるのを感じたのだった。上野広小路の裏にあるそのバーは、場所のせいか、客には土地の商家の人々が最も多く、会社員は少く、学生は更に少なかったもので、学生服のことが多い岸本は、よく目立つ筈だったが、それが逆に無視された形になって、誰の注目も惹かないらしかつた。彼の無口な田舎者らしい引込んだ態度も、その一因だったかも知れない。ところが、あのことがあつて以来、顔馴染の客は大抵、彼を避けると共に、彼の様子にそれとなく目をつけてるらしいのが、次第にはつきりとしてきた。そうなるも彼も意地で、なお屢々通うようになった。別に何というあてもなく、隅の卓子につくねんと坐つて、ウイスキーやコニヤツクの杯をなめるのだった。サチ子が時々相手になりに来たが、別に話もなく、冗談も少いので、すぐに行つてしまった。マダムが時折、無関心らしい視線を送つてくれた。

土地の商家の若い人たちも、屢々やつて来たが、彼に対してはもう素知らぬふりで、会釈さえしなかつた。そして彼の存在を全く無視したような振舞で、他に客がないと、マダムをつかまえて下卑な冗談口を云いあつたり、植木鉢をわきに片附けて、ジャズで踊つたりするのであった。それが実は、彼の存在を意識しての上でだということが、眼付や素振で分るので、何かしらそこに陰險な狡猾なものが加わつてくるのだった。そればかりでなく、

若旦那風の角帯の男は、土地の安っぽい芸妓を二三人ひっぱってきて、のんだりふざけたりした揚句、君たちが奢る約束じゃなかったかと云って金を出そうとしないので、芸妓たちはきやつきやつと騒いでから、ああこれでいいわけねと、その一人が紙入から名刺を一つ取出した。どうして手に入れたか、依田賢造の名刺で、それをマダムに差出して、お勘定はこちらに……と、すまして、どやどやと、出て行ってしまったのである。マダムは顔色さえ変えず、いつものように、知的な顔に微笑を浮べて、そんなのをも迎え送るのだった。その虚心平気な態度を、岸本は感歎の念でまた見直すのだった。

ところが、或る晩、岸本が少々酔って、帰りかけると、扉の外に「若禿」がよっかかるようにして立っていた。童顔の頭が禿げかかって近眼鏡をかけてる、一寸胡散にも利口にも見える背広の中年の男で、いつも一人でやってくる常連のうちだったが、それが、先程からそこに立っていた様子をごまかそうともせず、ほほう……と岸本の顔を眺めて、丁度いいところで出逢ったから、一緒につきあってくれと、もう既に酒くさい息を吐きながら、岸本の肩をとらえて、バーの中へでなく、ほかの方へ引張っていくのだった。そして近くのおでん屋へ引張りこんで、一体あんたはマダムに惚れてるのかどうかと、突然尋ねだしたのである。岸本が言下に強く否定すると、彼は握手を求めて、あんたは正直だから信用

してあげると、他愛なく笑ってしまふのだったが、暫くすると、ほんとに惚れていないのかと、またくり返すのだった。そして、僕はあんたの云うことを信ずる、「ドラ鈴」とマダムと関係のないことも信ずると、一人で饒舌りちらしてから、あんたはほんとに惚れていないんだねと、またくり返すのである。その度に何度も握手を求めて、それから彼を引張って、バー・アサヒへ逆戻りしてしまった。岸本は酔ってもいたが、何かしら引きずられる真剣なものを彼のうちに感じて、云われる通りに引廻されてしまったのであった。

バーの中には、土地の若い人たちと、他に二人会社員がいた。「若禿」はまんなかの卓子に坐って、アサヒ・カクテルを三つ、三つだと念を押して、それからふと立上って、蓄音器のところへ行き、しきりにレコードをしらべて、一枚の夜想曲をかけさせ、このバー独特とかいうすつきりしたカクテルが来ると、マダムを呼びよせ、岸本とマダムの手に一杯ずつ持たせて、立上ったのである。

「ええ……小生は、マダムとドラ……依田氏との間の、純潔を信ずるものであります。そしてここに、お目附役の岸本君の立合のもとに、マダムへ結婚を申込むの光榮を有するのであります。」

そしてぐつと一息に杯を干して、尻もちをつくように椅子に腰を落して、きよとんとし

てるのであつた。とり残された岸本とマダムとは、杯を手にしたまま眼を見合つたが、その時、一寸緊張したマダムの顔が、花卉のように美しく岸本の眼に映つた。岸本は一息に杯を干したが、マダムは唇もつけないで、卓子の上に杯を戻して、もういたずらな笑みを含んだ眼付となつていた。

「まあ。」と卓子をとんと叩いて「ばかばかしいわね。何を二人で、たくらんでいらしたの。」

それが「若禿」に衝動を与えたらしかつた。彼はひよいと頭をあげて、マダムが立去つてゆくのに眼もとめずに、岸本の顔をまじまじと見ていたが、長い手を延して、岸本の手をとつて打振りながら、岸本へ向つてではあるが、酔つ払いの独語の調子で饒舌りだすのだった。

「僕は……ねえ君、僕は、たくらみだの、邪推だの、そんなことが、第一性に合わないんだ。だから、君の言葉を信ずる。愛すべき青年よ……愛すべき……彼女よ、マダムよ。彼女は純潔なり。ドラ鈴と、関係などあつてたまるものか、僕が保証する。マダムは生活のために奮闘しているんだ。ブルジョア共には分らない。マダムは可愛い娘のために働いているんだ。依田氏がそれを預つて、育てていてやればこそ、マダムは後顧の憂いなく、

こうして奮闘しているんだ。ねえ君、そうじゃないか。娘を預って、後見の役目をつとめる、それがなんで醜悪なものか……。」

岸本は眼を見張った。「若禿」の言葉に彼の頭はひっかかったのだった。マダムに子供があつて、それを依田氏が引取つて……そんなことを、彼は一度も聞いたことがなかつたのである。二三日前、彼は依田氏を訪れて、金を二十円借りてきたところだった。買いたい書物があるという口実だったが、実はこのバーに来るための金で、依田氏もそれを見抜いてるらしく、金はすぐに出してくれたが、この頃だといふ盛んだそうだねと、暗に皮肉な訓戒を初めて、寺井さんところに余り入りびたつて学業をおろそかにしてはいけない、尤もあすこだけなら安全だが……と、後は例の哄笑で終つたが、岸本は少々冷汗をかいたのだった。そしてその時も、子供のことなんかは、おくび 嘔気にも出なかつた。マダム自身も子供のことは匂わせたこともなかつた。それを「若禿」が知つてるのが不思議だった。不思議と云えば、先達のことなどもこの常連にみな知られてしまつてるらしかつた。岸本は茫然として、マダムの方を見やると、彼女は「若禿」の言葉が聞えるのか、聞えないのか、澄しきつた様子で、サチ子と笑顔で何か囁きあいながら、夜想曲に耳を傾けてるのであつた。「若禿」はまだ岸本の手を握りしめて、饒舌り続けてるのである。

「君を、君のような純情な青年を、マダムの目附役に選んだのは、依田氏もさすが眼が高い。君は大任を帯びてるんだ。いいか、しっかりとやり給え、そこで、僕も、君に大任を果さしてやるために、その一助にだ、君の立合のもとに、マダムに結婚を申し込む。僕がいの一番で、そうだろう、先約なんだから、これからは、僕の承諾なしに、マダムには指一本さすこともならない……とこういうわけさ。目附役の君が証人だ。いいか、証人は神聖な誓いだ。改めて僕は、依田氏の許へも、結婚の申込をする。マダムとその娘と……三人の新生活だ。おう神よ……と……というところだが、僕は今……なあに、酔ってやしないんだ。君はまだ青二才で、人生の奥底は分らない。だから、僕のこの胸中も分らないだろうが、マダム……マダムなら分ってくれる。そういうわけなんだ。そのわけが、君にも今に分るようになる。だから、しっかりとし給えというんだ……。」

本気だか酒の上でだか、そのところは分らなかつたが、その饒舌に、真面目なものと嫌悪さるるものを感じて、岸本はそつと手をはらいのけた。すると「若禿」はぐつたりとなつて、卓子の上につつ伏してしまつたのだつた。

岸本は立上つて、スタンドの方へ歩みより、マダムをよんで、アブサンを一杯もらつた。何かしら酔つ払いたい気持だつた。コップの水にアブサンが牛乳のように混和してゆく。

を、心地よく見つめて、その眼をずらしていくと、すぐ前に、マダムの笑顔があった。

「子供のこと、本当ですか。」と彼は囁いた。

マダムはにつこりうなずいて、今まで知らなかったのですかと、囁き返すのだった。彼が知らないでいるのが不思議そうらしかった。依田さんの奥さんが引受けてくれてるのであって、このバーも奥さんの後援で、一々会計報告までもするんだそうだった。そこで一寸眼をしばたたいで、まるでだしぬけに、涙ぐんでしまったのだが、もうすぐに笑顔をしてるのだった。いつもより老けて、眼尻の皺が目立った。岸本はコップの白い酒をおおった。

あーあ、とわざと大きな欠伸の音がすると、マダムはするりとそこをぬけて、声の方へやっていった。棕櫚竹の葉影に彼女のすらりとした姿がつつ立って、それが何やら小さく首をふると、わーつと歓声があがって、サチ子はまたビールの瓶を持っていった。決して客席に腰を下さないのがマダムのたしなみで、つつ立ったまま、土地の商家の人たちにインテリ風な冗談をあびせるところは、バーのマダムという言葉にじっくりはまってるのであった。

岸本は蓄音器のところへ行つて、レコードを一枚一枚とりだしては、その譜名を丹念に

読んでいった。あらゆるものがごっちゃにはいつていて、その錯雑さのなかで眠くなってしまう。

揺り起されて彼が眼をさました時には、バーの中は静まり返って、客はもう誰もいなかった。サチ子が眠そうな眼で笑っていた。マダムはスタンドで、眉根をよせながら伝票を調べていた。岸本は大きな長い足を引きずって「若禿」を起しにいった。何かしら腹がたつて、拳固で背中をどやしつけてやると、彼はぎくりとして、川獺のような顔付をもたげた。その眼が、そして頬まで涙にぬれてるのだった。眼をさまして、またしくしく泣きだした。岸本はまた腹がたつてひどくなぐりつけてやった。「若禿」は泣きやんで、唾者のように黙りこんでしまった。そして勘定を払って、ふらふらと出て行った。岸本もその後続いた。マダムが戸口まで送ってきて、小首をかしげて見送ってくれる眼付を、岸本は背中に感じて、拳をにぎりしめながら、大地を踏み固めるような気持を足先にこめて大股に歩いた。

それから五日目の朝、岸本は下宿屋の電話口に依田氏から呼びだされて、いきなりどなりつけられた。前々日の晩、バー・アサヒへ行つて、マダムの平静的な顔を見てきたばかり

のところなので、一層驚かされたのだった。この頃学校へは行ってるか、というのをきっかけに、バーへばかり入り浸って勉強はどうしたんだ、というのだった。酒に酔っ払って、下らない連中に交って、何もかもべらべら饒舌りたてて、俺も寺井さんもどんなに迷惑してるか分らない。そんなことのために、寺井さんはバーを止めてしまった、というのだった。岸本にはまるで訳が分らなかつた。だがそんなことには頓着なく、依田氏の声は引続いていった。酔っ払って夜遅くやってきては、毎晩のように寺井さんの裏口に忍んでくる、あの犬のような男は何だ。俺の家へまで手紙を寄来して、何という恥知らずの男だ。あれが君の友人なのか。君から話があつてる筈だというが、一体どういふ話だ。それに君は、あの土地の芸者とも知りあいらしいが、そんなに墮落したのか。自分の年齢を幾つだと思つてゐるんだ。心が改まらなければ、郷里の両親へ手紙を出して、早速学校も止めさしてしまう……。とそんなことが、ひどく早口になったり、ゆるくなったり、ぼつりと途切れたりして、岸本の耳に伝わってくるのだった。岸本は呆氣にとられて、理解しようとする。ことよりも、依田氏の手を——肉が厚く皮膚がたるんでいて、棕櫚の毛を植えたような大きな手を——ふしぎに眼の前に思い浮べてるのだった。そして言葉が切れると、それは何かの誤解だからこれから伺います、と叫んだのだったが、来るには及ばないと一言のもと

にはねつけられて、根性がなおつたらそれから来い、弁解の必要はない、とただそれだけで、そして多分はあの小柄な奥さんだろうが側の人と何やら囁く声がして、電話はがちやりと切れてしまった。

岸本はその十分間ばかりの電話に汗ばんで、それから啞然として、自分の室にいつて寝転んだ。あの「若禿」が何か粗忽をしたらしいことは分ったが、自分が何か饒舌りちらしたとか、芸者がどうだとか、そんなことはまるで見当がつかなかった。まさかマダムが嘘をつくわけはなかった。彼は一切のことを依田氏へ手紙を書き送ろうと、その筋途を頭で立て初めたが、そのうちに、はかばかしくなってきた。そう考え出すと、何もかもばかげてきた。ばかげていて訳が分らなかつた。一体「東京」そのものが、卑俗で軽佻でばかげていて、そのくせ、何かしらこんぐらかつた底知れない不気味なものがあるようで、さっぱり見当がつかないのだった。そして妙に頼りない宙に浮いたような自分自身を見出し、強烈な洋酒の味だけが喉元に残っていて、マダムのことが、丁度少年の頃寺井菊子さんのことを考えたのと同じくらい漠然と、考えまわされるのであつた。

三日後に、岸本は学校宛の手紙を受取った。——こんど都合で、バーを止めることになりました。御好意は忘れません。いずれまたお目にかかることもあると存じますが、御身

体を大切になさいませ。——とただペン字でそれだけで、所番地もなくTとだけしてあった。岸本はそれを上衣の内隠しにしまつて、さて、マダムが依田氏の家に居るだろうとは想像したが、暫く行くのを差控えて、その代りに、バーの方を訪れてみた。戸が閉つていて、貸家札がはつてあつた。岸本はその前に暫く佇んで、それから、大通りを、明るい方へとやたらに歩いてみるのだった。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第三卷（小説3 [# 「3」 はローマ数字、1-13-23] ）」未来社

1966（昭和41）年8月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2008年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田舎者

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>